連載企画

ある編集委員の留学記
その３：アメリカ・カナダの大学院

関屋大雄 千葉大学　萬代雅希 静岡大学　宮澤高也 情報通信研究機構

1. まえがき

夏も終わり秋に移り変わろうという時期にこの原稿を書いています．夏はちょっとした芝生の上にはホタルが舞い，幻想的な世界を作り出します．日本で野生のホタルを見たことのない私にとってはそれだけで感激でした．ホタルの姿が見えなくなるのと入れ替わりに，今度は秋の虫の大合唱が始まります．木々も何となく色づき始めた気がします．長い冬を前にした一番いい季節です．自然を通じて四季の移ろいを感じながら，楽しく研究を進めています．

さて，今回は「社会人のための大学・大学院」と連動した記事として，北米の大学院と学生の考え方について実際に話をし，聞いたことを咀嚼しながらまとめてみたいと思います．日本と同様，大学院・研究室のあり方は，大学ごと，更には同じ大学でも研究室ごとに様々であり，先生が 100 人いれば 100 通りのパターンがあります．そこで，今回は少しでも話を一般化できたらと 3 名の共著で話を進めさせて頂きたいと思います．ここで各自の留学先，留学時期，専門分野などは表のとおりです．場所，大学のレベルも適度に散らばっていると思います．

こちらの大学に滞在し，日本とシステムが明らかに違うところがあり，魅力的なところも目につきますが，かといって，すべてにおいて日本より魅力的かと言いますと，そうとは言いきれません．私も日本の大学教員の一人として，日本の大学の方がいいと自信をもって言えなければなりませんし，そう思う点も多々あります．どちらにせよ，選択肢の一つとして海外の大学院を検討することは決して悪いことではないと思います．本稿をその検討の一助という位置付けでお読み頂ければ幸いです．

2. アメリカも理系離れ？

留学生が多い！

6 月にこちらの学位授与のセレモニーに出席しました．そこで学部・修士・博士の卒業者一覧が冊子になって配布されました．その中を見ると，学部生はほとんど地元の出身なのですが，修士になると，留学生（International Student）の割合が高くなり，博士はほとんど留学生でした．アメリカ人はどこにいってしまったのか？　と思ってしまうほどです．こちらの教授に聞いてみると，ほとんどの学生は進学せずに就職してしまうそうです．また，就職してから，改めて大学院に戻るケースもあるそうですが，その場合も卒業大学にこだわることなく，今やりたいこと，興味のあることができる大学（研究室）を選ぶ傾向にあるそうです．

一方，アメリカでも，工学系を志望する学生が減少傾向，つまり「理工離れ」がじわじわ進行しているようです．それは，医者，弁護士，経営などの給料がいいので，そちらを志向する学生が増えているとのことで，理工離れは先進国共通の悩みなのかもしれません．また，工学系の中で，3 名の筆者がそれぞれ在籍した電子通信分野に関し，アメリカ人の興味が薄いという可能性もあります．通信関連の論文の著者を見て

筆者の留学先と時期

著者	留学先	構成（留学当時）	研究分野	教授の出身	留学時期
関屋	Wright State University (WSU) OH, USA	博士　5 名 修士　2 名	パワーエレクトロニクス 通信用電源回路	ポーランド	2008 年 2 月～
萬代	The University of British Columbia (UBC) Victoria, Canada	博士　10 名 修士　1 名	符号理論･無線通信システム 無線ネットワーク	インド	2006 年 10 月 ～2007 年 9 月
宮澤	University of California, Davis, (UC Davis) CA, USA	ポスドク　6 名 博士　9 名 修士　8 名	次世代ネットワークシステム 光 CDMA・無線プロトコル等	韓国	2006 年 4 月 ～2007 年 3 月

▲ナイアガラの滝(9 月末)：デイトンから車で 6 ～ 7 時間の距離です.

も，最近アジア系がものすごく多いと感じる方が多いのではと思います.

アジアからの留学生

関屋のいる研究室は小規模ではありますが，博士課程は 5 名います．その中でアメリカ人は 1 名しかおらず，そのほかはインドから 3 名，エジプトから 1 名です．また，萬代，宮澤の留学先研究室も International Student の占める割合は高く，インド，バングラデシュなどの南アジア，韓国，中国などの東アジアからの留学生が多数を占めています．この中で日本の割合が低いのは，日本の大学が魅力的なためか，英語の問題なのか．答は分かりませんが，こちらにいると，(日本以外の)アジアのパワーを感じます.

エンジニアの社会的ステータス

工学部離れのような傾向があったとしても，アメリカ，カナダにおけるエンジニアの社会的ステータスは日本より高いであろう，というのが筆者 3 名の共通した認識です．また，例えばインドでは，エンジニアに対するあこがれは強いらしく，親に工学を強く勧められるのが一般的だそうです．一流のエンジニアになるべく，そのステータスを求めて世界中から様々な学生が集まる．それがこちらの大学院の姿かと思います.

教員も国際的

教員もとても国際的です. 筆者 3 名の留学先の教授も，ポーランド，インド，韓国出身の教授であり，外国からの教員がいても何の違和感もありません．WSU を例にとると，半数以上がアメリカ以外の出身です．世界各国から優秀な研究者を教授として取り込み，その上で世界各国から優秀な学生を取り込む．また，研究者から見てそれに見合った環境が整備されているともいえます．これが日本の（目指すべき）将来の姿かもしれない，とも思います.

3. 大学院進学のモチベーション

最大の動機は探究心

さて，そのような中で，大学院進学のモチベーションはどこにあるのでしょうか．実際に博士課程の学生数名に進学した目的を聞いてみました．すると，ほとんどの学生が「研究を深く掘り下げたい」という回答でした．もうちょっと突っ込んで，将来の希望給料・職種などについて聞いてみると，当然のように「いい提示があるところに行くし，それなりの対価を求める」と答えてくれました．これは，「博士のステータスはあらためて言うまでもなく高いものである」という認識をもっていることを示しています．ちょっと変わった動機としては，「自分の教わった教授が博士をもっていないので，自分が博士を取って，国に帰って教授を指導したい」というのもありました．これはインドからの留学生の話です.

▲ International Friendship Affair での一幕 (Wright State University)：多く国からの留学生が集まります.

学位を「資格」ととらえる

一方，こちらの人にとっての大学院進学の意味を垣間見られる例として，次の 2 例を紹介したいと思います.

お世話になっている教授の学生で，工学で修士を取得し，2 年ほど社会人として働いていた人がいました．しかし，その仕事をしているうちに，放射線技師になるといい給料がもらえて，かつ人材不足ということを知ったそうです．すると，すっぱり仕事をやめ，放射線技師に必要な知識を付けに，改めて専門の大学院に入り直し，今は相当な高給取りになっているそうです．学位の取得が，会社を辞めること，2 年間新たに学ぶことを差し引いても余りあるリターンがある一例かと思います.

▲左：Wright State University（冬），中：The University of British Columbia（秋），
右：University of California，Davis（夏）場所が違えば雰囲気も違います．

同様に工学部で修士を取得したある人は，そのまま博士にいくことも考えたそうですが，あえて博士に進学せず，経営修士（MBA）を取得するために，もう一度修士課程に入り直し勉強したそうです．就職時には「工学修士をもっている経営修士」として，良い待遇で就職できたそうです．この例では，修士課程在学中に自分の将来設計が理系から文系に変わったことになります．このとき，改めて文系の大学院に入り直すことに何の躊躇もなかったと言っていました．これも，新たに大学院に入って勉強し直すことによる時間と費用のマイナスよりも，MBA を取得することのプラスの方が大きいと判断した例だと思います．

以上のように，工学に限らず，大学院進学，修士，博士の取得は自分のキャリヤアップととらえている傾向は強いと感じます．自分の将来のビジョンをもち，そこに必要な「資格」として修士，博士を取得するという感覚のように感じます．修士，博士の社会的ステータス，企業の雇用制度，及び給与体系など社会的背景の違いがあってのことで，簡単にこの考えを日本に当てはめることはできません．しかし，日本ではなかなかない発想であり，大変興味深く感じました．

社会人への対応

アメリカにも会社に勤めながら大学院に通う学生がいます．日本と同様，会社から学位を取るために大学院への入学を許可される学生もいますが，個人的に仕事とは別の時間（夕方や休日）を使って，学位を取りにくる学生もいます．したがって，大学院の講義も夕方から始まる講義があり，それが社会人対応のコースとなっています．例えば通常 8 時から 17 時までが定められた勤務時間とすると，7 時から 16 時まで仕事をし，16 時から大学院に来て勉強・研究をします．聞いているだけでとてもハードなのですが，学位を取得するということにそれだけのメリットがあるようです．また，研究に関しても会社から派遣される場合は会社での研究を大学院での研究成果とします．一方，仕事をもちながら個人的にくる学生は，仕事が終了した後，及び土日に来て研究を進めます．

博士の社会的待遇は？

実際に学部，修士，博士で給料はどのくらい変わるものなのでしょうか．ある教授は「学部：修士：博士 ＝ 2：3：4」と言っていました．博士は学部の倍もらえるのが相場だということです．実際に具体的な額を何人かに聞いてみたところ，博士をとった直後に年収 1000 万円（10 万ドル）を超えるケースは決して珍しくないようです．このような給与体系も，大学院進学の大きなモチベーションの一つとなっていることは間違いなさそうです．

自分を売り込む手段として

日本では「博士をもっているからといって全員優秀とは限らない．かえって視野が狭いので…」というネガティブな方向で，博士の評価を聞くことがあります．この話をこちらですると，「自分が優秀であることをどうやって主張するのか？自分が優秀であり，能力をもっていることを示す手段の一つが博士の取得である」という意見が返ってきました．学位に対する考え方の違いを端的に表しているのではないかと思います．

4. 大学と研究室

研究室配属は大学院から

日本のように学部から全員が研究室に配属され，研究を進めるという大学はそれほど多くないようで，少なくとも著者 3 名の留学先はいずれも研究室は大学院に入ってから配属されます．UC Davis，UBC は修士から，WSU では修士論文も選択制となっており，希望者のみが研究室に所属します．その代わり，学部生には学科が企業と協力して進めるテーマや，ロボコンのような大会に出場することを目的とした「学科プロジェクト」を準備し，研究と同等な経験ができる場を提供しています．このような仕組みがあることはこちらに来るまで全く知りませんでした．

また，前章のとおり，学生は自分の将来設計に従って柔軟に大学院を選ぶ傾向もあり，修士，博士の進学のタイミングで，大学，専攻，研究室を変えていくことに何の抵抗もないようです．したがって，学部–修士–博士と一つの大学 / 研究

室で終えることなく，いろいろな場所を経験して博士を取得する学生の方が多いのではと思います．

指導教授との信頼関係

大学院進学，特に博士課程進学の場合は，指導を受けたい教授を決め，その教授のいる大学に進学するという順序で進学先が決まります．教授の選択が自分の将来を決めるといっても過言ではありません．大学入学の前に，教授にアポイントを取って，面接をし，両者納得の上で進学を決定します．博士の取得に関しては，学内で内規はあるものの，最終的には教授の判断にゆだねられる部分が非常に大きく感じます．博士取得の要件は日本と同様論文数，学会発表数が基準となっています．しかし，論文数は学内の内規に足りていても，もし教授が内規以上の論文数を求める場合，修了は先送りになります．また，そうしても学内で何の問題にもなりません．逆に論文の本数に対する内規がない大学もあるようです．その場合，教授と学生自身が「博士号に値する見識と知識を有する」と自信をもって言える状態になり，他の審査委員を納得させられれば博士号を取得できるというわけです．修士も同様で，教授が認めなければ，2年で修士を取得することはできません．つまり，2年間で修了できる保証は入学時点でどこにもないケースもあります．逆に教授に認められ，修士は1年間で博士にスキップした学生もいました．結局は実力次第ということになります．

研究室決定にもマッチング

たいていの教授は，研究室配属を希望する学生に対し，あらかじめ面談をし，相互のマッチングを取って配属を許可するようです．教授の示す条件に学生が納得できない場合，逆に教授が学生の力量的に受け入れることが厳しいと感じた場合は他の研究室に，ということになります．このとき，教授は学生に対し何年間で博士を取らせる，という類の話は一切ありませんし，学生もそれを求めません．教授は学生が博士に相当する力をもったと判断した時点で博士を与え，学生もその点に関しては教授に全幅の信頼を寄せている．そのような目に見えない信頼関係が感じられます．

▲学位授与式（Wright State University）：学部・大学院にかかわらず多くの家族がお祝いに駆け付けます．

博士授与は教授にとっても名誉

WSUの学位授与式では，学部，修士，博士を一緒に行いました（ただし，学部単位で分かれる）．この中で，博士号授与は特別で，一人ひとり登壇し，学長から直接学位記を授与されます．また，博士を取得した学生とともに指導教授も名前が呼ばれ，学生と一緒に登壇します．そして壇上で指導教授から学生にケープをかけるという儀式がありました．そこからは，学位を取得した学生に対するお祝いはもちろん，それを指導した教授にも畏敬の念を表す，という姿勢が見えます．他大学の状況などは分かりませんが，これを見て，博士という学位を取得すること，また授与することはとても大きなことである，ということを感じました．

5．海外留学のために（入学方法）

まずは自分で調査

こちらの学生にどのような手順で大学，研究室を選んだのかを聞いてみました．まず大前提として，自分の進みたい方向，やりたい研究をしっかりもっていることがあります．その中で，Webで研究室を検索し，更に知人，先輩など，既に留学している人の話を聞いて，研究室を選択し，教授に直接アポイントを取るようです．もちろん，理想は大きな大学の有名な教授の研究室に所属することですが，競争率も激しく，そう簡単には入れません．その場合，次の考慮として，大学のレベルは落ちるが有名な先生を選ぶか，または大学のレベルは高いが名前があまり通っていない先生を選ぶかということになります．

Weakness produces weakness

これは，ある教授が言っていた言葉で，一度負の連鎖に入ってしまうと立ち直ることは極めて難しい，ということを表しています．アメリカの一般社会でも言えることかもしれませんが，これは教授がアメリカの大学の状況を指して言った言葉です．アメリカの大学では多額の予算を日本以上に局所的に投入する傾向があるそうで，大学・研究室ごとに研究費のある，なしは極端です．大きなプロジェクトを動かしている研究室は，多くの人材が集まり，それにより多くの研究成果が生まれ，また多くの資金が集まる，と好循環に回ります．一方，逆のパターンにはまり込むと，なかなか好循環にもっていくことはできません．研究室選びのポイントとして，「いかにアクティブに活動しているか」は最重要項目です．大きなプロジェクトを多数抱えている教授，プロジェクトはもっていないが多くの論文を発表している教授，など学生の立場から見ていろいろな指標がありますが，自分なりに明確な基準をもって研究室選びをする，というのが多くの人から聞けた共通事項です．

プロジェクトは共同研究という形で違う大学がメインになっていることもあります．例えば，WSU では，いくつかの研究室は隣の空軍大学院と共同でプロジェクトをもっており，主研究者としてこちらの教授は出てきませんが，密接に連絡をとりながら，学生は一緒に研究を進めている，という例もありました．日本からネットだけで調べられるとは思いませんが，大学間の教授同士のつながりも研究室選びの重要な情報のようです．

国際会議もアピールの場

論文誌，国際会議の発表論文は，研究室に入るための大きなアドバンテージになることは間違いありません．更に，大きなプロジェクトをもっていて，特にアクティブに動いている研究室の教授は，優秀な学生を確保すべく，国際会議の場で学生をスカウトすることもあると聞きます．学生時代にそのようなことを考えたことは一度もありませんでしたが，国際会議は研究成果だけでなく，自分をアピールする大切な場所と考えている学生がこちらには多いように感じます．国際会議の場では，どのような人がどのように見ているか分かりません．もしかすると大きなチャンスが転がり込んでくるかもしれません．学生の皆さんが国際会議で発表する機会に恵まれましたら，自分をアピールする，ということを少し意識しながら発表してはどうでしょう．それも国際会議の一つの楽しみ方かもしれません．

Graduate Record Examination（GRE）

大学院入学のためのセンター試験のようなものが，このGRE です．GRE は 1 年間にわたって，何回も行われており，1 人年 5 回まで受験ができるそうです．GRE は English，Math，Analytical（小論文）の 3 科目からなり，配点はそれぞれ 800 点，800 点，6 段階の評価になります．一般的には大学院入試に代わりこの試験の点数を要求されます．それぞれの科目，特に英語に関しての難易度に関する情報，各大学で要求される点数などについてはよく分かりませんでした．

これまでの成績・業績・その他

GRE の結果に加え，自己アピール，志望動機，そして学部，更には修士の成績を提出します．更に，推薦書を添付するのが一般的だそうです．当然，成績は大学内の相対評価であるため，大学間のレベルの差を考慮しなくてはなりません．そのため，Web などで志望者の出身大学について徹底的に調べることもあるそうです．ただし，多くの場合は研究室にアポイントを取る際にあらかじめ資料を提出していますので，そこである程度ふるいにかけられていることになります．したがって，研究室から入学許可が出た場合は，よほどのことがない限り入学できると考えていいようです．

6. 大学院の講義はきついのか？

大学院の講義内容は教授が自由に決定

WSU を例にとると，学部の講義は学科カリキュラムに従って教えるべき内容が詳細に決まっているため，教授に授業内容を自由に決定する余地はほとんどありません．一方，大学院の講義内容は，各教授の裁量に任されているところが大きいため，教授が個人的に興味のある，現在進行形の問題を扱うことが多いようです．授業を締切りとして，自分で本の内容を書き進め，それを講義資料とする教授もいます．したがって，毎年講義の内容が変わる先生も多いと聞きます．

多種多様な評価方法

評価の付け方は様々です．日本と同様，大きく分けると試験かレポートか，ということになりますが，両方課す講義もあります．また，レポートの課題の与え方も個性があります．前述の本を書きながら講義をする先生は，本に載せる例題を作るべく，学生に課題を解かせ，数通りの回答例を得るということを行っています．また，これらを通じて，本の中の分かりにくいところを修正していくそうです．一方，一端の研究になるような具体的な課題を与え，その問題に対し独自のアイデアを要求し，結果とレポートを求める場合もあります．このタイプは講義時間外の作業が非常に多くなります．このような科目が 2，3 個重なると，それだけで四苦八苦して研究どころではない，という学生もいます．

必要単位は？

WSU を例にすると，修士，博士で必要な単位数はそれぞれ 45 単位，135 単位です．なお，博士論文が合格した時点で 60 単位が付きますので，講義からもらうべき単位は 75 単位となります．更に，修士から博士に直接進級した場合は，修士の 45 単位を繰り替えることができます．この単位数は日本と比較して少し多いぐらいでしょうか．なお，WSU では，Semester（2 学期）制ではなく，Quarter（4 学期）制をとっており，1 コマ 4 単位が基本ですので，Semester 制の多い日本の大学と単位の単純比較はできないことに御注意下さい．

Semester 制は試験を入れて 16 週，Quarter 制は試験を入れて 11 週ですから，Quarter 制は 1 年でトータルすると Semester 制と比較して 12 週多いことになります．しかし，ほとんどの学生は，夏学期はインターンシップに出るため，または途中長期旅行などを入れるため講義を全く取りません．この場合，学生にとってはセメスタ制と実質の講義量は変わらないことになります．夏学期は社会人大学院生のために必要であると説明してくれました．夏学期は休みを取りやすいことなどもあり，社会人大学院生の割合が増えるようです．また夏学期には集中講義なども準備されており，それが社会人学生対象のプログラムになるようです．

すべてがドライなわけではない

試験期間中，点数の譲歩をお願いにくる学生の列を見かけます．私が日本でもっていた印象ほどドライでなく，人情味のある柔軟な対応も見ることができます．このような学生に対しては，追加レポート，または研究室学生の書いた論文のスペル / 文法チェックなどを課し，多少おまけしてあげているようです．私の論文もこの救済処置を使ってチェックしてもらったことがあり，「ネイティブチェック」として個人的には大変助かっています．また，レポートの文章が複数人全く同じ内容だった，ということで，当該学生を全員呼び出している光景も目にしました．そこら辺は日本と変わらないな，と思いました．

7. 在学中の学費

学費は高額だが

こちらの学費ですが，日本と比較して高いと思われます．一例として WSU の International Student の学費は，およそ修士で年間 1 万ドル，博士は年間 2.4 万ドルになります．州立大学ですので，アメリカ人はこれと比較して費用が軽減され，また，私立大学はこれよりも高いのが相場のようです．ところが，博士の学費に関しては，ほぼ全員何らかの補助を得ており，額面は高額ですが，実際に学費を直接負担している学生はほとんどいない，というのが現状のようです．

学費の負担

学費の補助はいろいろな形態があります．WSU の場合，博士に進学する学生が少ないこともあり，ほとんどの学生が大学から Scholarship を得ており，実質学費は一切かかりません．そのほか，研究室の経費から出る場合も多いと聞きます．また，会社などから派遣されて学位取得を目指す学生もいます．そのような学生は，学費は会社が負担するケースがほとんどです．会社から派遣される場合，研究内容も職務と関連した内容で，仕事の内容がそのまま研究成果になる例がほとんどです．ただし，これらも入学前に指導教授との打合せがあり，両者納得の上で研究を進めることになります．

いろいろな形で収入を得ている

博士課程では，既に結婚している学生も多く，ある程度の収入を確保する必要があります．例えば，プロジェクトに携わっている研究室では，そのプロジェクトから学費補助以外に Research Assistant として収入を得る学生もいます．この場合，博士を取得するための研究とはいえ，半分仕事をしているような感覚で研究室に通うことになります．

同じような例ですが，教授が仕事場を紹介することもあります．例えば WSU のある学生は，教授が空軍研究所の仕事を紹介し，講義以外はそこで仕事をしています．ここでの仕事内容は，研究プロジェクトの一環にもなり，仕事をしながら研究を進めるという形になります．講義のほかに研究に関する教授とのディスカッションは大学で行い，また空軍研究所に戻り仕事をする，という生活サイクルです．このように，研究をする場所は大学内とは限らず，大学外で研究を進めている例も見受けられます．そのほかには TA で収入を得ている学生もいます．TA で年間 1.5 万ドルほど収入があるそうです．

以上のように，決してすべての生活費が賄える状況とは言えませんし，日本人が海外留学するとしたら，それなりの負担が増えます．しかし，このような補助が期待できるということは知っておいて損はないと思います．

8. 修了後の進路

就職活動は早くても半年前から

こちらの大学院は，入学は学期替りを区切りにいつでも可能で (Quarter 制では年 4 回)，修了時期も教授が認める時期によりますので，いろいろなタイミングで卒業することになります．基本的には，アカデミックカレンダーに従って，秋から仕事につくケースが多いようですが，御存じのように，終身雇用ではありませんので，特に専門的な力が要求される博士に対する求人は，1 年中何らかの形であるようです．また，日本のように 1 年近く前から就職活動をすることはなく，学部生の場合，6 月卒業の学生は 3 月くらいから就職活動をする学生が多く，修士の場合は半年くらい前から就職活動が始まります．

インターンシップ

就職するための有効な手段として，インターンシップがあります．前述のとおり，夏の間，多くの学生がインターンシップで大学を留守にします．インターンシップの探し方は，自分で応募する，教授に指定され送り込まれる，の両方があるようです．インターンシップを通じて互いに仕事のマッチングをし，そのまま内定をもらうというのも，就職するための一つの方法です．そのため，インターンシップに参加するために，自分を売り込む必要があり，ここで就職活動と同じようなプロセスを踏むことになります．学生の立場から見ると，インターンシップへの参加には，実際の職場を経験する，産業的な立場から現状の課題を知り自分の研究に生かす，仕事を探す手段として参加する，と様々な参加動機があるようです．

就職の難易度

就職の難易度に関しては，国にかかわらず共通で，景気に左右されます．景気がいいときは仕事に就くのは簡単で，逆に景気が下り坂のときは，なかなか仕事に就くことはできません．一方，景気の悪いときに力を発揮するのが学位だそうで，給料が低くてもかまわないという姿勢であれば，仕事にあぶれることは滅多にないそうです．ただし，給料の低い仕事は契約せず，常にいい条件の会社を探す姿勢をもっている人がほとんどです．

例えば博士をもつ人に対しての求人があった場合は当然博

士をもつ人の間で競争することになります．最終的にはその人の能力が評価されるわけですが，厳然たる事実として，出身大学，指導教授の名前で競争のスタートラインが変わるというのはあります．入学時に研究室探しを真剣にする理由の一つはここにあると思われます．ただし，一度就職してしまえば，大学名などは関係なく「博士取得者」として同じ条件で仕事をするそうです．

一度就職したあと，条件の良い仕事を求めて，転職を重ねて自分のキャリヤアップを図るという例はエンジニアの世界にもあるようです．教授のお嬢さんは，最初の仕事で良い条件の仕事につき，結婚を機に西海岸から東海岸へ引っ越すことになり，転職したそうですが，「娘は西海岸で既にひと財産できた」と言っていました．転職するときは，アプライしたら，その経歴書を見て逆に一本釣りされたそうです．キャリヤアップに博士という学位をどのように使うかは人それぞれですし，すべての人が成功するとは限りません．しかし，博士という学位は自分のステータスを上げるための強力な武器となることは間違いなさそうです．

9. む　す　び

今回は，こちらの学位に対する考え方，及び大学院について紹介しました．ここに書いた内容は，それほど多くないサンプルから紹介した例であり，これがすべての場合にあてはまるわけではない，という点は御理解下さい．本稿を通じて，北米の大学院の様子を少しでも感じて頂き，進学の選択肢の一つとして，海外留学を考えるきっかけとなれば幸いです．

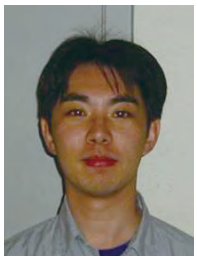
日本の大学にもこちらにはない，いいところがいっぱいあります．いろいろ検討して，自分を高めるために最もいい進路を決定できればいいのではないでしょうか．私は大学院を海外で，ということは1秒も考えませんでしたので．

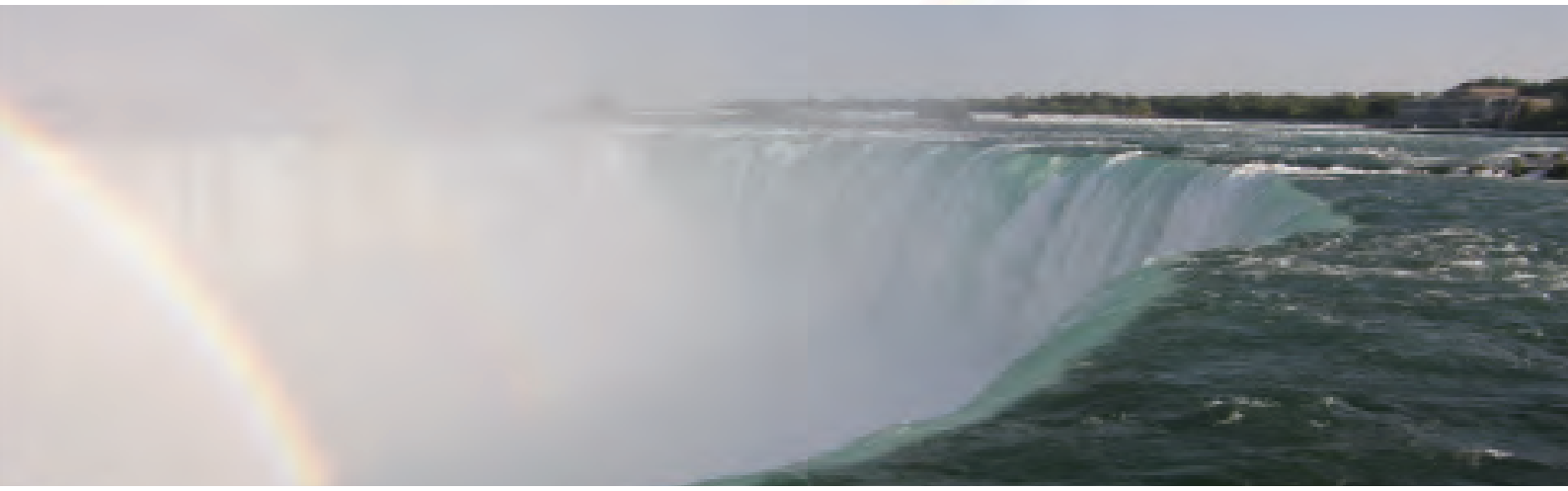
関屋　大雄（正員）

▶ 2001 慶大・電気・博士課程了．現在，千葉大学融合科学研究科・助教．2008 より Wright State University 訪問研究員．博士（工学）．留学中の息抜きはゴルフとネット将棋．

萬代　雅希（正員）

▶ 2004 慶大・開放環境・博士課程了．現在，静岡大学情報学部・助教．2007 から 1 年間 University of British Columbia 訪問研究員．博士（工学）．留学中，息抜きの小旅行で熊に遭遇．



宮澤　高也（正員）

▶ 2006 慶大・開放環境・博士課程了．現在，（独）情報通信研究機構に勤務．2006 から 1 年間 University of California，Davis 訪問研究員．博士（工学）．留学中，息抜きで，友人とハイキングや JAZZ クラブへ．